

片岡王寺跡第3次  
発掘調査報告書

2006. 3

王寺町教育委員会

片岡王寺跡第3次  
発掘調査報告書

2006.3

王寺町教育委員会

## 序

このたび、『片岡王寺跡第3次発掘調査報告書』を発刊する運びとなりました。本書で報告しているのは、国道168号線の拡幅事業に関わって実施した片岡王寺跡における発掘調査です。

片岡王寺跡については、これまでほとんど発掘調査が実施されたことはありませんでした。しかし、国道の拡幅事業に関連して、ここ数年のうちに4次の調査を重ねることとなり、これらの調査によって、片岡王寺は現在の国道付近にまで、その境内が大きく広がっていたことがわかってまいりました。

この片岡王寺の「王寺」は、今の王寺町という地名の発祥になっていると考えられています。その意味でも片岡王寺跡は、王寺町にとって大切な遺跡です。今後も町民皆様の心の拠り所となるように、大切に遺跡を守っていきたいと思います。

最後に、発掘調査にご協力いただきました岩松寺をはじめ、文化庁や奈良県教育委員会文化財保存課など、関係者の皆様に御礼申し上げます。

平成18年3月

王寺町教育委員会

教育長 北 義次

## 例　　言

1. 本書は奈良県北葛城郡王寺町本町1丁目地内における片岡王寺跡第3次発掘調査の発掘調査報告書である。  
片岡王寺跡は『奈良県遺跡地図』(奈良県教育委員会 1998年)に10-B-5として登載されている。

2. 調査は奈良県教育委員会文化財保存課の調整のもと王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

王寺町教育委員会	教育長 金森利匡 (~2006.1)
	北義次 (2006.3~)
	教育次長 中井康員
	社会教育課長 藤山雅章
	同係長 白石良文
	同主事 岡島永昌 (現地調査)
	同臨時職員 櫻井恵 (現地調査)
調査・整理補助員	岡田雅彦、古賀萬代、後藤真、野間理恵子
発掘作業員	福井工務店、御安西工業に委託

3. 調査地は奈良県北葛城郡王寺町本町1丁目1698番1で、調査期間は2005年5月23日～6月10日および同年10月12日～同月21日。調査面積は72m<sup>2</sup>である。

4. 本書で使用している座標数値は世界測地系に基づくもので、水準地はT.P.値(東京湾平均海面値)を使用している。

5. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

6. 本書は第1章・第2章・第4章を岡島永昌が、第3章を櫻井恵が執筆し、編集は岡島が行った。

7. 調査にあたっては岩松寺にご協力いただき、奈良県立橿原考古学研究所の廣岡孝信氏にはご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

## 本文目次

第1章 はじめに .....	1
第2章 調査の内容 .....	4
第3章 出土遺物 .....	14
第4章 調査の成果 .....	20

## 挿図目次

図1 調査地と周辺の遺跡 (1/25000)	図12 J トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)
図2 トレンチ配置図 (1/500)	図13 K トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)
図3 A トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図14 L トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)
図4 B トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図15 M トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)
図5 C トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図16 N トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/80)
図6 D トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図17 出土瓦実測図1 (1/6)
図7 E トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図18 出土瓦実測図2 (1/6)
図8 F トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図19 出土瓦実測図3 (1/6)
図9 G トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図20 出土須恵器・土師器実測図 (1/4)
図10 H トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図21 出土軒丸瓦実測図 (1/4)
図11 I トレンチ遺構平面図・土層断面図 (1/50)	図22 片岡王寺関連遺構平面図 (1/100)

## 写真図版目次

### 写真図版 1

B トレンチ素掘り溝検出状況（北東から）

B トレンチ柱穴検出状況（西から）

B トレンチ柱穴 1 半裁状況（南から）

### 写真図版 2

B トレンチ柱穴 2 半裁状況（西から）

B トレンチ柱穴 3 半裁状況（南東から）

B トレンチ柱穴 4 半裁状況（南西から）

### 写真図版 3

C トレンチ遺構検出状況（東から）

D トレンチ遺構検出状況（東から）

E トレンチ素掘り溝検出状況（南東から）

### 写真図版 4

E トレンチ柱穴 12 柱痕跡半裁状況（南西から）

F トレンチ素掘り溝検出状況（南から）

G トレンチ遺構検出状況（東から）

### 写真図版 5

H トレンチ遺構検出状況（東から）

I トレンチ素掘り溝検出状況（東から）

J トレンチ素掘り溝検出状況（南から）

### 写真図版 6

K トレンチ素掘り溝検出状況（南から）

K トレンチ柱穴 7 土層断面（東から）

L トレンチ素掘り溝検出状況（北西から）

### 写真図版 7

L トレンチ柱穴 5 半裁状況（西から）

M トレンチ素掘り溝検出状況（南西から）

M トレンチ柱穴 10・S D 11 土層断面（西から）

### 写真図版 8

N トレンチ素掘り溝検出状況（北から）

N トレンチ整地土断ち割り状況（北から）

N トレンチ S D 47 半裁状況（南から）

N トレンチ S D 47 土層断面（北西から）

### 写真図版 9

N トレンチ S D 47 土層断面（南西から）

N トレンチ柱穴 45 土層断面（南東から）

N トレンチ柱穴 46 柱痕跡検出状況（南東から）

### 写真図版 10

出土遺物 1

### 写真図版 11

出土遺物 2

### 写真図版 12

出土遺物 3

## 第1章 はじめに

### 1 調査の契機

片岡王寺跡第3次発掘調査は、奈良県北葛城郡王寺町本町1丁目に所在する融通念仏宗岩松寺の庫裏建て替えを契機としている。岩松寺は王寺町立王寺小学校運動場の北側、国道168号線に面してその西側に建立されている。庫裏は近年に建てられたもので老朽化していたわけでもないが、庫裏部分が国道拡幅事業用地にかかることになったため、その部分から立ち退いて事業用地にかかる部分で新しく庫裏が建立されることになった。

### 2 調査地の歴史的環境

岩松寺は片岡山と号し、大念仏寺（大阪市平野区）を本山とする融通念仏宗寺院である。延宝5年（1677）「大念仏寺四十五代記録并末寺帳」によれば、開基年暦は不明であるものの淨土宗から融通念仏宗に転派したとあり、中世以来の村の道場的性格をもった堂宇が近世になって大念仏寺の末寺になったものと考えられる。境内には南辺の中央に表門があり、その北側に阿弥陀如来坐像を安置する本堂、本堂の西側に十一面觀音立像を安置する觀音堂、表門の北東側に鐘樓がある。本堂は棟札によって享保2年（1717）に融谷上人法巖和尚の勧進で建立されたことが明らかである。表門と鐘樓も構造形式などから本堂建立後まもない頃の建立と考えられている。

周辺の遺跡としてまずあげられるのは達磨寺（19）と片岡王寺跡（20）である。達磨寺は岩松寺の国道を挟んで東側には接する位置にある。達磨寺の境内整備事業にともなって行われた発掘調査によって、達磨大師の墓であると考えられた達磨寺3号墳が13世紀に整備されるかたちで寺院として成立していった歴史が具体的に明らかになってきつつある。達磨寺第10次調査では、国道168号線の東側拡幅部分において達磨寺境内の西側を区画していた濠かと見られる溝も検出されている。

一方、片岡王寺跡は王寺町立王寺小学校の校舎部分に中心伽藍が展開していたと考えられる寺院遺跡である。その付近では今となっては遺跡の兆候すら確認できないが、明治20年（1887）頃までは基壇や礎石が遺存していたと報告されており、南向きの四天王寺式伽藍が想定されている。創建は7世紀前半と考えられている。片岡王寺跡については、中心伽藍の想定位置からは東に100mほど離れるものの、ここ数年来、国道168号線の西側拡幅部分において発掘調査が実施され、奈良時代の石積み溝とそれにともなう掘建柱群、掘建柱建物・樋、飛鳥時代の大溝などが検出されている。とくに、今回の調査地付近にあたる中心伽藍の北東側において掘建柱建物が集中している状況が見えはじめている。

少し目を広げてみると、周辺には寺院遺跡が多く点在していることもうかがえる。香芝市尼寺には尼寺北廃寺（26）、尼寺廃寺南遺跡（27）がある。北廃寺は東向きの法隆寺式伽藍をもち、南遺跡は同じ伽藍配置でこちらは南向きである。付近には所用瓦を供給したと考えられる平野窯跡群（28）もある。片岡王寺にやや遅れる7世紀半ばから後半にかけて創建されたと考えられている。王寺町葛下には詳細は不明であるものの寺院跡かと見られている遺跡（21）もある。西安寺跡（15）は王寺町舟戸、現在の舟戸神社境内に所在し、西向きの法隆寺式伽藍をもつかと想定され、7世紀前半の創建と考えられている。大和川を隔てた三郷町勢野には平隆寺跡（7）がある。南向きの四天王寺式伽藍をもち、7世紀前半の創建と考えられている。周辺には寺に瓦を供給した窯跡が多く分布している。

古代において大和川以南の片岡と称される地域は、敏達天皇系王族が拠点を置いていた地域であると考えられ、当地域の多くの遺跡がそれに関するものとして比定されている。片岡王寺跡・尼寺北廃寺・尼寺廃寺南遺跡は敏達天皇系王族によって創建されたと考えられており、河合町薬井の薬井瀧ノ北遺跡（22）からは長屋王邸所用瓦を焼いたとされる窯跡が発見された。また、香芝市今泉の平野塚穴山古墳（29）は茅渟王の埋葬墓であるとする考えがあり、広陵町馬見北の牧野古墳は押坂彦人大兄皇子の埋葬墓であるとする説が有力である。



- 1 今池瓦窯 2 汗ノ垣内瓦窯跡 3 峯ノ阪古墳 4 峯ノ阪遺跡 5 上ノ御所瓦窯 6 勢野茶臼山古墳  
 7 平隆寺跡 8 立野城跡 9 久度遺跡 10 立野遺跡 11 久度南遺跡 12 神南古墳群 13 神南遺跡  
 14 舟戸・西岡遺跡 15 西安寺跡 16 西安寺瓦窯跡 17 岩才北古墳 18 達磨寺古墳群 19 達磨寺  
 20 片岡王寺跡 21 寺院跡? 22 萩井瀧ノ北遺跡 23 畠田城跡 24 片岡城跡 25 畠田古墳 26 尼寺北魔寺  
 27 尼寺魔寺南遺跡 28 平野窯跡群 29 平野塚穴山古墳 30 平野古墳群 31 送迎山城跡 32 下牧瓦窯跡

図1 調査地と周辺の遺跡 (1/25000)

### 3 調査の経過

今回の調査地周辺には、とりわけ周知の埋蔵文化財包蔵地として達磨寺と片岡王寺跡の二つの遺跡があるが、厳密にいえば当該地はそのどちらにも含まれない位置にある。しかし、先にも述べたように国道168号線拡幅事業にともなう発掘調査によって、片岡王寺に関する遺構が当該地周辺にも広く展開していることが明らかになってきており、同時に達磨寺に関する遺構も確認されてきている。したがって、当該地はそのいずれかの遺構が存在している可能性が十分にあり、両者の遺跡範囲がよりいっそう明確になると考えられたために、工事着手前に発掘調査を実施することとなったのである。

さて、新しく建立される岩松寺庫裏は鉄骨3階建てである。通常の建物基礎の掘削が及ぶ範囲は現地表から40cmであるが、これを建築するためには当該地の地盤が悪いらしく、部分的に平面が1~2m四方の大きさで2m以上を掘り下げ、ラップルコンクリートによる地中杭を造って土壤改良が行われる計画であった。このことから、調査では、まず当然、遺構面の破壊が予想された地中杭部分で試掘調査を行い、地山レベルと地山上での遺構の有無を確認することとした。これがAトレントとBトレントである。その結果、両トレントとともに現地表下約1.1mのところで地山を確認し、Bトレントでは多数の遺構を確認した。この成果を得て、この遺構面のレベルであれば通常の建物基礎部分では工事掘削によって遺構が破壊されないこととなったために、今回の調査は庫裏建築のための地中杭部分でのみ行うこととした。これがA・Bトレントに続く、C~Mトレントである。これらの調査は2005年5月23日から開始し、6月10日に終了した。このほか、国道拡幅後の道路境界部分にコンクリート塀を築造する計画があり、そのほとんどの範囲で基礎掘削が遺構面を超えて行われる予定であったが、これについては庫裏の建築工事がほぼ終わった段階で改めて実施することとなった。これを実施したのが2005年10月12日から同月21日であり、Nトレントである。Nトレントは基礎掘削が遺構面を超えて行われる範囲で実施し、遺構面が保存される南端付近では調査しなかった。では以下に、このような経過で実施した片岡王寺跡第3次発掘調査の内容について合計14ヶ所のトレントごとに報告することとしたい。

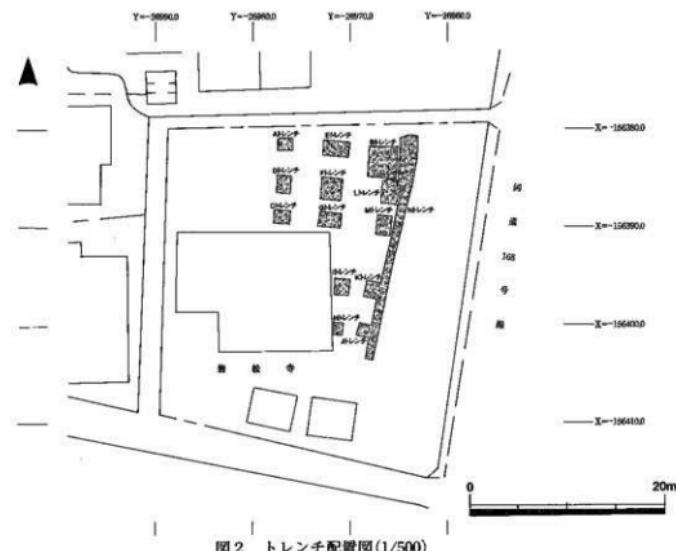


図2 トレント配置図(1/500)

第2章 調査の内容

## 1 Aトレンチ

岩松寺本堂の北側、敷地の北端付近に位置するトレンチである。大きさは南北1.3 m、東西1.6 m。現地表下約1.1 m、標高39.9 m付近において暗灰黄色で細粒砂混じり粘土の地山を確認した。地山上において遺構精査を行ったが、Aトレーニチでは遺構がまったく存在しなかった。

なお、このトレンチによって調査地の層序は、おむね上から順に近現代盛土層、近世盛土層、中世遺物包含層、地山となっていることが判明した。

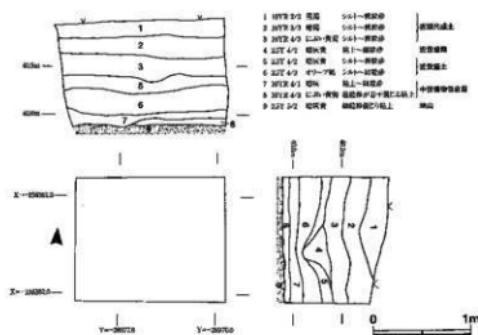


図3 Aトレンチ遺構平面図・土層断面図（1/50）

## 2 日トレンチ

岩松寺本堂の北東側、敷地の北端付近に位置するトレンチである。大きさは南北3.2m、東西3.0m。現地表下約0.9~1.1m、標高39.9m付近において褐色でシルト~微粒砂の地山を確認した。地山上では、まず多数の素掘り溝が切り合い関係をもなながら、南北方向・東西方向に展開している状況が検出できた。素掘り溝はSD3・SD6のように途中で途切れてしまっているものもある。SD1・SD5・SD7・SD8では瓦器片が出土しているので、時期の特定は難しいが中世の遺構であることは明らかである。一方、SD2・SD3・SD4・SD6からは土師器片・須恵器片・瓦片が出土するだけで瓦器片が見られないが、遺構の形状からして瓦器が出土する素掘り溝と大差ない時期の遺構と考えられる。素掘り溝のほかにはSK9・SK10・SK11の土坑3基を検出した。以上の遺構を完掘した後、地山の土にまだ混じり気が見られたために引き続いて遺構の検出に努めた。しかし、何かしらの遺構があるようには感じられるもののその形がはっきりと見えず、遺構検出が非常に困難な状況であったのでトレンチ全体を約10cm掘り下げることとした。その上で再度、遺構精査を行ったところ4基の柱穴と4基の土坑が、さらに遺構削前を進めるうちに土坑内からも複数の遺構が順次、検出された。柱穴はいずれも柱痕跡が直徑約20cmの円形で、掘形が1辺70~80cmの方形である。柱穴4は柱痕跡が半分ほど掘形からはずれた位置にあった。柱穴の柱痕跡を結ぶと南北が2.0m、東西が2.5mとなる。後述するEトレンチの柱穴12、Lトレンチの柱穴5などとともに1棟の掘建柱建物を構成すると考えられる。ただし、柱穴3と柱穴4の柱間距離は2.3mしかない。これは柱穴3から東西の柱間距離である2.5mをとると、その位置が柱穴4の掘形内におさまるので、検出した柱穴4の柱痕跡は柱の抜き取りなどの影響で移動しているものと考えられる。どの柱穴からも時期の確定ができるような遺物は出土していないが、古代の瓦片や土師器片・須恵器片が出土している。詳細は第4章で述べるが、これらの柱穴は8世紀後半頃のものと考えられる。SK17は南北長が60cm以上、東西長が1.2mあり、トレンチ外へと続いているが方形になると見られる。SK17の埋土からはSP15・SK16・SP22を検出した。これらはSK17が埋まる過程で形成されたものと考えられる。SK13・SK14では、遺構完掘後にその下層からそれぞれピット、土坑を検出した。なお、SK17やSK12は素掘り溝を検出したときからその位置に遺構があるらしいことは判断できていたが、形がはっきりと認識できなかった。したがって、トレンチ全体を約10cm掘り下げて検出した遺構も最初に検出できた素掘り溝などと遺構面は同じであると判断できる。調査現場では判断できなかったが、素掘り溝とともに検出したSK9は柱穴3の掘形である可能性が高い。

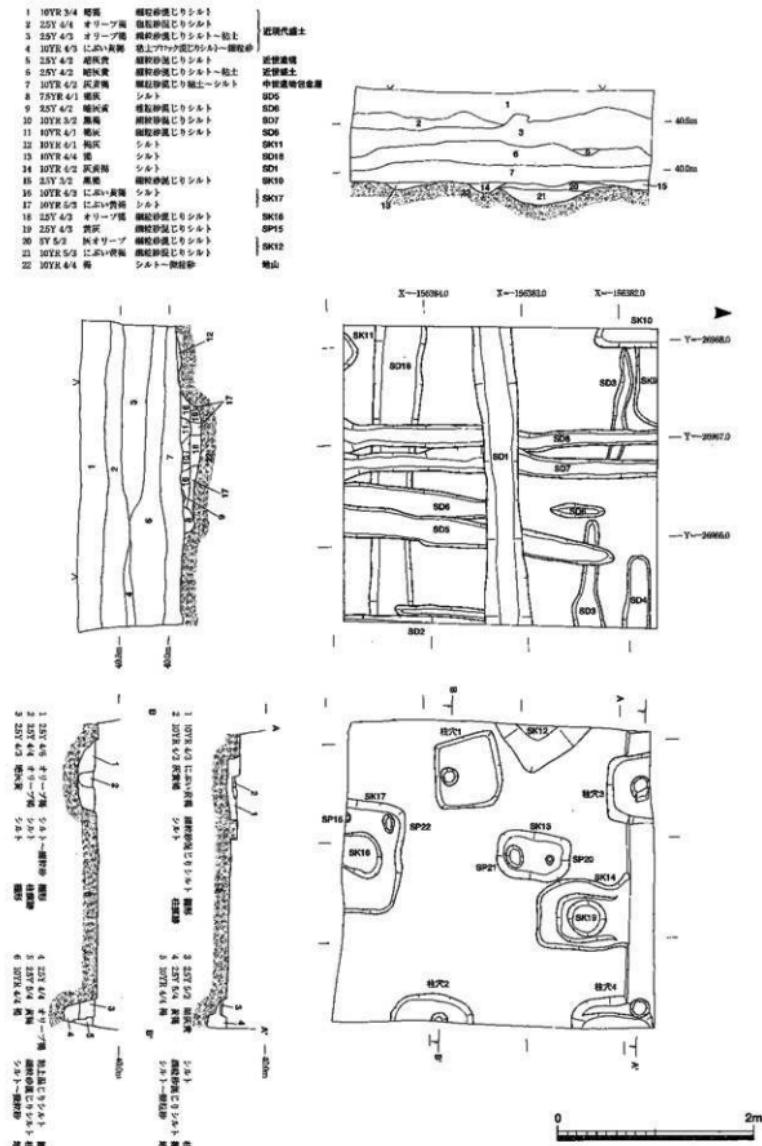


図4 Bトレインモダン横半面図：上層断面図（1/50）

### 3 Cトレーニング

岩松寺本堂の北側には接するトレーニングである。大きさは南北1.6m、東西1.6m。現地表下約1.0m、標高40.0m付近において黄褐色でシルト～粘土の地山を確認した。

地山上ではSD1～SD4の素掘り溝が南北方向に展開している状況が検出できた。SD4からは遺物が出土しなかったが、その他のSD1・SD2・SD3からはいずれも瓦器片や瓦質土器片などの中世遺物が出土した。

これらの素掘り溝を完掘した後も遺構検出に努めたが、Bトレーニングで見られたような柱穴などの古代遺構は存在しなかった。

### 4 Dトレーニング

岩松寺本堂の北側、AトレーニングとCトレーニングの間に位置するトレーニングである。大きさは南北1.7m、東西1.6m。現地表下約1.1m、標高39.9m付近において黄褐色でシルト～粘土の地山を確認した。トレーニングの西壁全体とトレーニング内の西側付近では大きな擾乱があったが、地山上で南北方向の素掘り溝SD1を1条、SP2のピット1基、それにトレーニング北壁にかかるSK3・SK4の土坑2基を検出した。SK3・SK4はトレーニングの北壁付近で一部が見えているだけであるので、素掘り溝である可能性もある。SD1・SP2からは瓦器片が出土し、SK3・SK4からは遺物が出土していない。

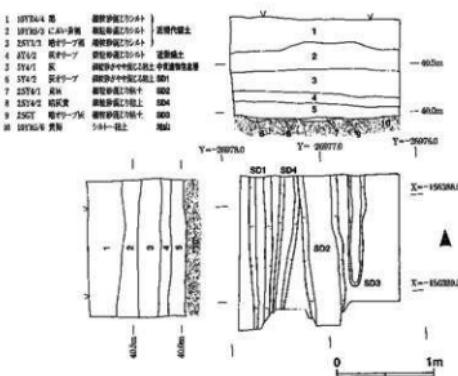


図5 Cトレーニング平面図・土層断面図(1/50)

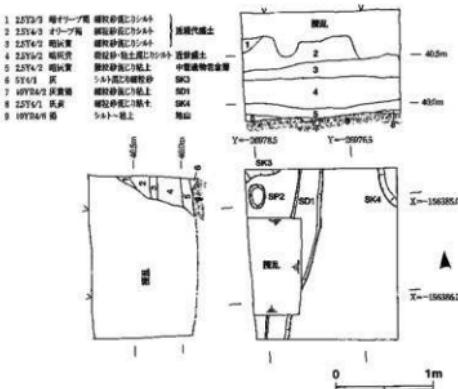


図6 Dトレーニング平面図・土層断面図(1/50)

### 5 Eトレーニング

岩松寺本堂の北側で敷地の北端付近、AトレーニングとBトレーニングの間に位置するトレーニングである。大きさは南北1.5m、東西2.7m。現地表下約1.0m、標高39.9m付近において黄褐色でシルト～粘土の地山を確認した。

地山上では南北方向・東西方向に素掘り溝が切り合い関係をもしながら展開している状況が検出できた。SD5・SD6は途中で途切れてしまっている。ほかにSK2・SK9の土坑2基も検出したが、これらの土坑は遺構の幅や深さが素掘り溝のそれに近似していることから、素掘り溝の痕跡である可能性もある。SK2とSD6からは瓦器片が出土しており、その他の遺構からは上師器片・須恵器片・瓦片が出土していて瓦器が見られないが、ほぼ同時期の遺構と考えて差し支えないだろう。

以上の遺構を完掘した後、再度、遺構精査を行ったところ、トレーニング北東隅において柱穴12を検出した。柱穴

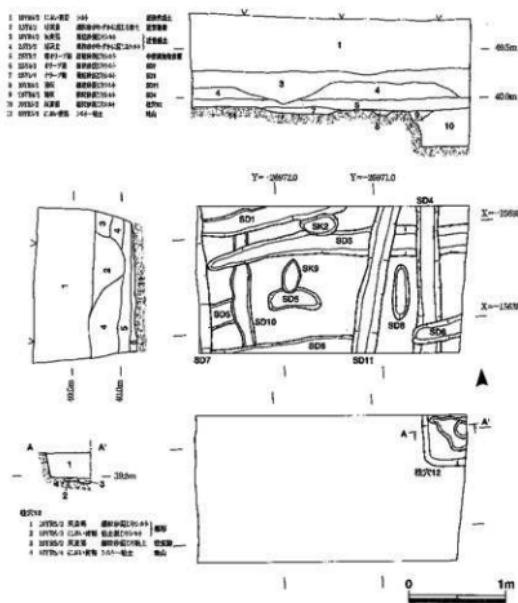


図7 Eトレンチ造構平面図・土層断面図(1/50)

## 6 Fトレンチ

岩松寺本堂の北側、Eトレンチの南側に位置するトレンチである。大きさは南北2.3m、東西2.3m。現地表下約1.0m、標高39.9m付近において褐色でシルトの地山を確認した。地山上では素掘り溝SD1～SD6が切り合ひ関係をもしながら南北方向に展開している状況が検出できたほか、SK10・SK11・SK12の土坑3基が検出できた。SK10は深さが約5cmと素掘り溝のそれと変わりなく、東西方向の素掘り溝が途切れてしまったものである可能性があるだろう。SD1・SD4・SD5からは瓦器片が出土している。その他のSD2・SD3・SD6からは土師器片・須恵器片・瓦片が出土しているだけで瓦器片が見られないが、素掘り溝はすべてほぼ同時期の造構と考えてよいだろう。SK11は近世盛土の上面から掘り込まれている土坑で、直径約90cmの円形になると見られる。埋土の状況から井戸であろうかと判断できたが造構掘削はしなかった。SK12は直径約80cmの円形になると見られる。時期を決定することができないような土師器の小片しか出土していないために詳細は不明であるが、切り合ひ関係から中世の素掘り溝よりは時期的にさかのぼることは明らかである。

以上の造構を完掘した後、地山土の状況からまだ造構が存在することが予想されたため、東壁付近で創溝を設けて断面観察を行ったところ、造構の存在を確認することができた。しかし、素掘り溝を検出した造構面ではその形状が明確にならないためにトレンチ全体を約5cm掘り下げることとし、再度、造構精査を行った。その結果、トレンチ南端付近においてSK13・SK14の土坑2基を検出した。SK13は1辺が約50cmの台形で、深さは約10cmである。SK13からは黒色土器B類の破片が出土している。SK14は現状では南北長が約70cm、東西長が約40cm、深さが約10cmある。形状はトレンチ外へと続くために不明であるが、Bトレンチ・Eトレンチの柱穴と同じく1辺約70cmの方形になる可能性もあることから、注意して精査を行ったが柱痕跡は検出できなかった。

12はトレンチ外へと続いているために詳細は不明であるが、1辺が約70～80cm前後の方形になると見られる。深さは約44cmある。柱痕跡は直径約20cmの円形である。柱は抜き取られたと見え、その痕跡が掘形の底の方でようやく確認できた。柱穴12は大きさ・形状ともにBトレンチで検出した4基の柱穴とほぼ同じで、さらに、Bトレンチの柱穴3・柱穴4と東西の直線上に並ぶ位置にあり、東西の柱間距離である2.5mとも合致することから、同じ建物を構成する柱穴と考えられる。柱穴12からは時期決定できるような遺物は出土していない。

なお、トレンチ西壁では近世盛土層から形成された造構があり、Aトレンチの東壁に見えている造構に続いていると考えられる。

- 1 10YTR4/4 にJn-1帶地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 2 10YTR4/3 にJn-1帶地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 3 10YTR4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 4 25Y4/2 砂質地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 5 25Y4/4 水ナリーブ  
シルト  
中生代物質層  
 6 25Y4/1 水ナリーブ  
シルト  
 7 25Y4/1 にAn-1帶地  
シルト  
 8 35Y4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
 9 35Y4/2 にAn-1帶地  
シルト  
 10 35Y4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
 11 35Y4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
 12 10YTR4/4 砂  
砂山

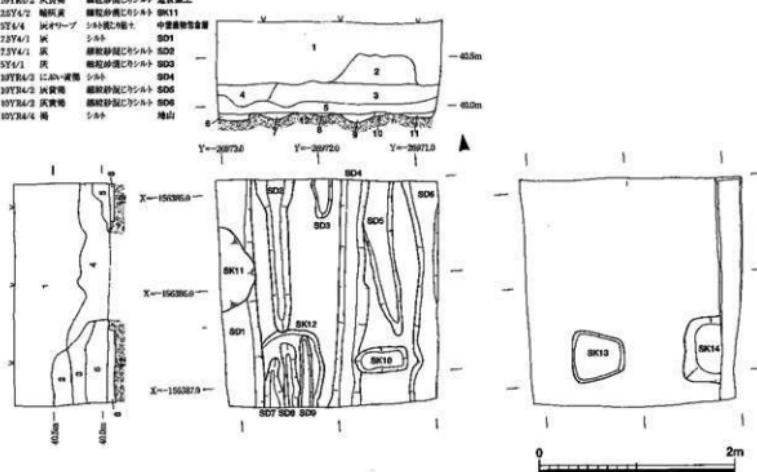


図8 Fトレチ造構平面図・土層断面図 (1/50)

- 1 10YTR4/4 砂  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 2 10YTR4/3 にAn-1帶地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 3 10YTR4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 4 10YTR4/1 砂質地  
細粒砂質にシルト  
近現代底土  
 5 25Y4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
中生代物質層  
 6 25Y4/4 砂質地  
シルト—細粒砂  
SD6  
 7 25Y5/2 水ナリーブシルト  
シルト  
 8 10YTR4/2 水質地  
細粒砂質にシルト  
中生代  
 9 35Y4/1 砂  
細粒砂—粗粒砂  
SD2  
 10 35Y4/2 サーパー風  
シルト—粗粒砂  
SD1  
 11 10YTR4/4 砂  
砂山

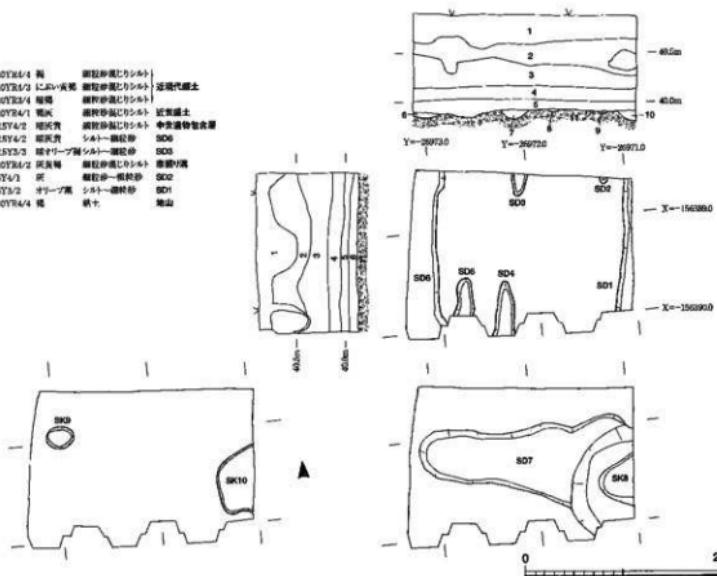


図9 Gトレチ造構平面図・土層断面図 (1/50)

## 7 Gトレント

岩松寺本堂の北東側にはほぼ接するトレントである。大きさは南北1.7m、東西2.3m。現地表下約1.0m、標高39.9m付近において褐色で粘土の地山を確認した。地山上では南北方向に展開したSD1～SD6の素掘り溝とそれに切れられる東西方向の溝SD7を同一面で検出した。SD1～SD6の素掘り溝からは土師器片・須恵器片・瓦片が出土しているだけで瓦器片が見られないが、他のトレントで検出している素掘り溝と同じく中世の遺構と考えて差し支えないだろう。

SD7はトレントの西端付近で途切れているが、東側はトレント外へと続いている。西端では幅約50cm、深さ約1cmであるが、東端では幅が約1.2mにまで広がり、深さも1段落ち込みがあって約11cmになる。後述するが、SD7から続く溝をMトレント・Nトレントからも検出しており、西に向かってさらに広く、深くなっていることがわかっている。SD7からは行基丸瓦(1～3)と土師器長頸壺の部体が出土している。

SD7の完掘後、その下層からSK9・SK10を検出した。SK9は南北長約20cm、東西長約30cmの梢円形で、深さ約5cm。SK10は南北長約70cm、東西長40cm以上の不正円形で、深さ約10cmである。

## 8 Hトレント

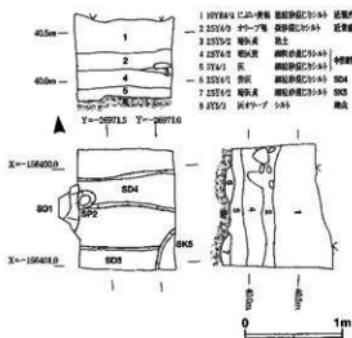


図10 Hトレント遺構平面図・土層断面図(1/50)

岩松寺本堂の南東側にはほぼ接するトレントである。大きさは南北1.2m、東西1.0m。現地表下約0.8～1.1m、標高39.8m付近において灰オリーブ色でシルトの地山を確認した。地山上では素掘り溝とそれを切るピット・土坑が検出できた。SD1からは中世に下るかと見られる土師器皿の破片が出土しているが、他の遺構からは時期決定できない土師器片・須恵器片・瓦片が出土していて瓦器片などは見られない。しかし、時期としては他のトレントで検出している素掘り溝と大差ないと考えられる。なお、後述するが、Jトレントでは標高39.8m付近で検出した遺構はオリーブ褐色でシルト～粘土の整地土層上に形成されていた。土色などを考慮すると、Hトレントで地山と認識した土もこの整地土にあたる可能性があることを付言しておく。

## 9 Iトレント

岩松寺本堂の東側にはほぼ接するトレントである。大きさは南北1.7m、東西1.5m。現地表下約0.9～1.0m、標高39.9m付近においてぶい黄褐色でシルト混じり粘土の地山を確認した。地山上では切り合い関係をもしながら南北方向・東西方向に展開するSD1～SD9の素掘り溝が検出できた。このうちSD5からは吊り紐痕のある丸瓦片や瓦質土器の口縁部・17世紀の大和I2型と見られる土釜口縁部などが出土している。トレント東壁に見えるように、SD5は近世盛土層と関連していることがうかがえ、出土遺物からも近世の遺構であることが明らかである。近世の岩松寺の築造にかかる遺構であろうか。SD5を除くその他の素掘り溝からは時期決定できない土師器片・須恵器片・瓦片が出土していて瓦器片は見られないが、他のトレントで検出している素掘り溝と大差ない時期の遺構であると考えられる。

これらの遺構を完掘した後、さらに遺構精査を行ったところSK10・SP11・SP12を検出した。SK10は径約80cmの不正円形で、深さは約15cmある。須恵器壺体部の破片、土師器片が出土しているが詳細な時期は不明である。SP11・SP12はともに直径約20cmの円形で、深さはSP11が約4cm、SP12が約3cmである。

1	2SY4/2	ガーピー陶	シルト混じり粘土質
2	2SY4/4	ガーピー陶	シルト
3	10Y4/6	にじみ青磁	シルト
4	2SY4/3	ガーピー陶	近表面土
5	8Y4/2	ガーピー陶	断面砂層(1)地土
6	4SY4/4/2	ガーピー陶	断面砂層(2)地土
7	2SY3/3	ガーピー陶	シルト
8	2SY4/2	瓦	SD1
9	2SY4/2	瓦	SD2
10	2SY4/4	瓦	SD3
11	2SY3/1	瓦	SD4
12	2SY4/2	ガーピー陶	SD5
13	HY4/4	ガーピー陶	SD6

13 SY4/4 地上部

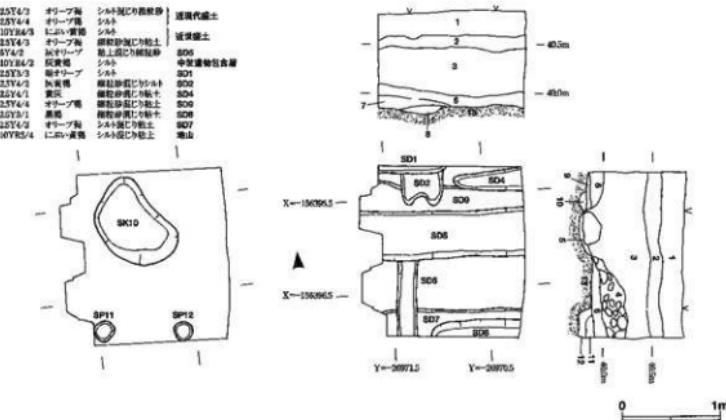


図11 I ドレンチ造構平面図・土層断面図(1/50)

## 10 J ドレンチ

岩松寺本堂の南東側、H ドレンチの東側に位置するドレンチである。大きさは南北 1.1 m、東西 1.1 m。現地表下約 1.0 m、標高 39.8 m 付近においてオリーブ褐色でシルト～粘土をベースとする造構面を確認した。造構面では土坑 2 基と東西方向の素掘り溝 2 条が検出された。造構からは須恵器片や暗文をもつ土師器皿の破片などが出土しており、瓦器片などの中世遺物は出土していないが、他のドレンチで検出した素掘り溝と同じ時期の造構である可能性が高いといえる。

以上の造構を完掘した後、造構面のベース土がこれまでのドレンチで確認した地山土とは異なるので、さらに精査を行って造構検出に努めた。しかし、造構の形が明確に見えなかったために全体的に約 10cm 挖り下げて再度、造構精査を行ったところ、ドレンチ北壁から西壁にかけて鉤状に曲がる SK 5 を検出した。SK 5 は深さが約 10cm で、造構内にはビット状の落ち込みがあった。SK 5 からは須恵器壺体部の破片と暗文をもつ土師器皿 (19) の破片が出土している。ドレンチ北壁の堆積状況から、SK 5 の西側は褐色で細粒砂～シルト混じり粘土の地山上から形成されており、素掘り溝などが形成されていた造構面のベース土は地山上に盛られた整地土層であることがわかる。SK 5 の東側は地山ではない土から形成されていたためにさらに造構検出に努めたが、明確な造構を検出することができなかった。別の整地土層にあたるのだろうか。なお、ここからは土師器皿や須恵器壺体部片・杯蓋片などが出土している。

1	ZSY4/4	ガーピー陶	シート	近表面土
2	ZSY4/3	ガーピー陶	須恵器～シート	近表面土
3	ZSY4/2	ガーピー陶	須恵器～シート	近表面土
4	ZSY4/2	褐色土	須恵器～シート	近表面土
5	ZSY4/2	褐色土	須恵器～シート	近表面土
6	ZSY4/2	褐色土	須恵器～シート	近表面土
7	ZSY4/1	ガーピー陶	SD1	SD2
8	ZSY4/2	ガーピー陶	SD3	SD4
9	ZSY4/2	ガーピー陶	SD5	SD6
10	ZSY4/4	瓦	SD7	SD8
11	ZSY4/4	瓦	SD9	SD10

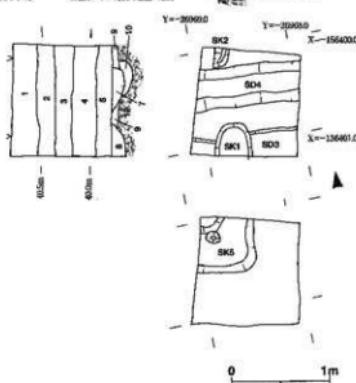


図12 J ドレンチ造構平面図・土層断面図(1/50)

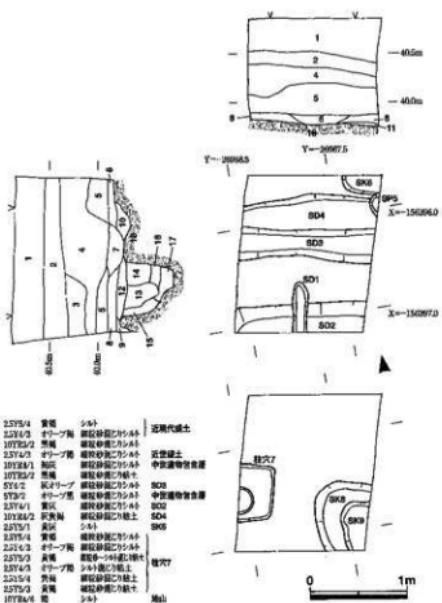


図13 Kトレントレンチ遺構平面図・土層断面図(1/50)

積しているので、柱は抜き取られたと考えられる。柱穴7からは古代の土師器片が出土している。Bトレントレンチの柱穴3・柱穴1と南北軸としては並ぶが、南北2.0mの柱間としては並ばない位置にあたるので、別の掘建柱建物や横などを構成していたと考えられる。

## 12 Lトレント

岩松寺本堂の北東側、Bトレントの南側には接するトレントである。大きさは南北2.5m、東西1.6m。現地表下約0.9m、標高39.9m付近においてオリーブ褐色で微粒砂がベースとなる遺構面を確認した。遺構面では南北方向の素掘り溝、SD1～SD4が検出できた。SD1・SD3からは瓦器が出土しているので、これらの素掘り溝は他のトレントと同様に中世の遺構と考えられる。

これらの遺構を完掘した後、ベースとなる土が地山土とは異なるためにさらに遺構検出に努めた。しかし、何らかの遺構の存在は確認できるものの、その形状が明確でないためにトレント全体を約10cm掘り下げて再度、遺構検出を行った。その結果、柱穴1基、土坑5基、溝1条の遺構を検出した。柱穴5は掘形が1辺約80cmの方形になると見られ、直徑約20cmで円形の柱痕跡があった。柱痕跡からは土師器片・須恵器片・瓦片に混じって黒色土器A類かと見られる小片が出土している。Bトレントの柱穴4・柱穴2と南北に並び、柱間距離も2.0mに合う位置にあるので、Bトレントの柱穴4基、Eトレントの柱穴1基と同じく1棟の掘建柱建物を構成していたと考えられる。また、柱穴5はトレント東壁から、素掘り溝の下に堆積していた黄褐色で細粒砂混じりシルトからなる整地土層の上から形成されていることがわかる。そして、その堆積土の下から褐色でシルト混じり粘土の地山を確認した。柱穴5以外の遺構はすべて地山上から形成されたものである。

## 11 Kトレント

岩松寺本堂の東側、Iトレントの東側に位置するトレントである。大きさは南北1.6m、東西1.4m。現地表下約1.0m、標高39.8m付近において褐色でシルトの地山を確認した。地山上ではSD1～SD4の南北方向・東西方向の素掘り溝のほかにSP5・SK6が検出できた。SP5・SK6は素掘り溝の一部の可能性がある。いずれの遺構からも上師器片・須恵器片・瓦片が出土していて瓦器片などは見られないが、他のトレントで検出した素掘り溝と同時期の遺構と考えられる。ただし、SD3だけは中世遺物包含層から形成されているので、他の遺構よりも時期は下る。

これらの遺構を完掘した後、さらに遺構検出に努めたところ、柱穴7とSK8を検出した。SK8は南北長が70cm以上、東西長が50cm以上で、その下層からはSK9を検出した。柱穴7は掘形が1辺約60cmの方形に、柱痕跡は直徑約25cmの円形になると見られる。柱穴埋土の上辺には若干の土が堆

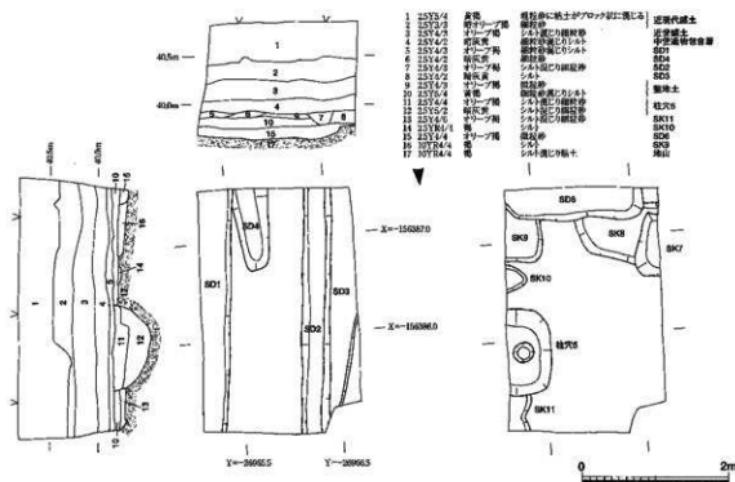


図 14 L トレンチ造構平面図・土層断面図 (1/50)

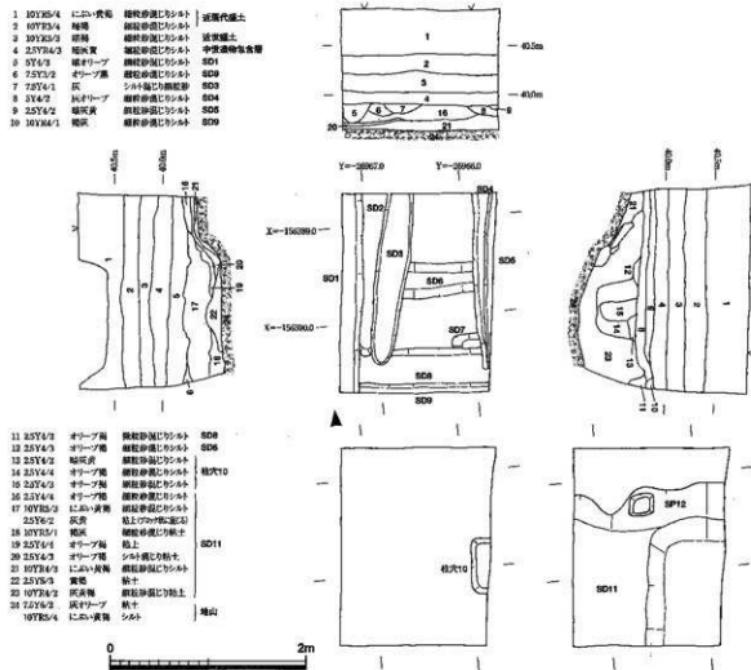


図 15 M トレンチ造構平面図・土層断面図 (1/50)

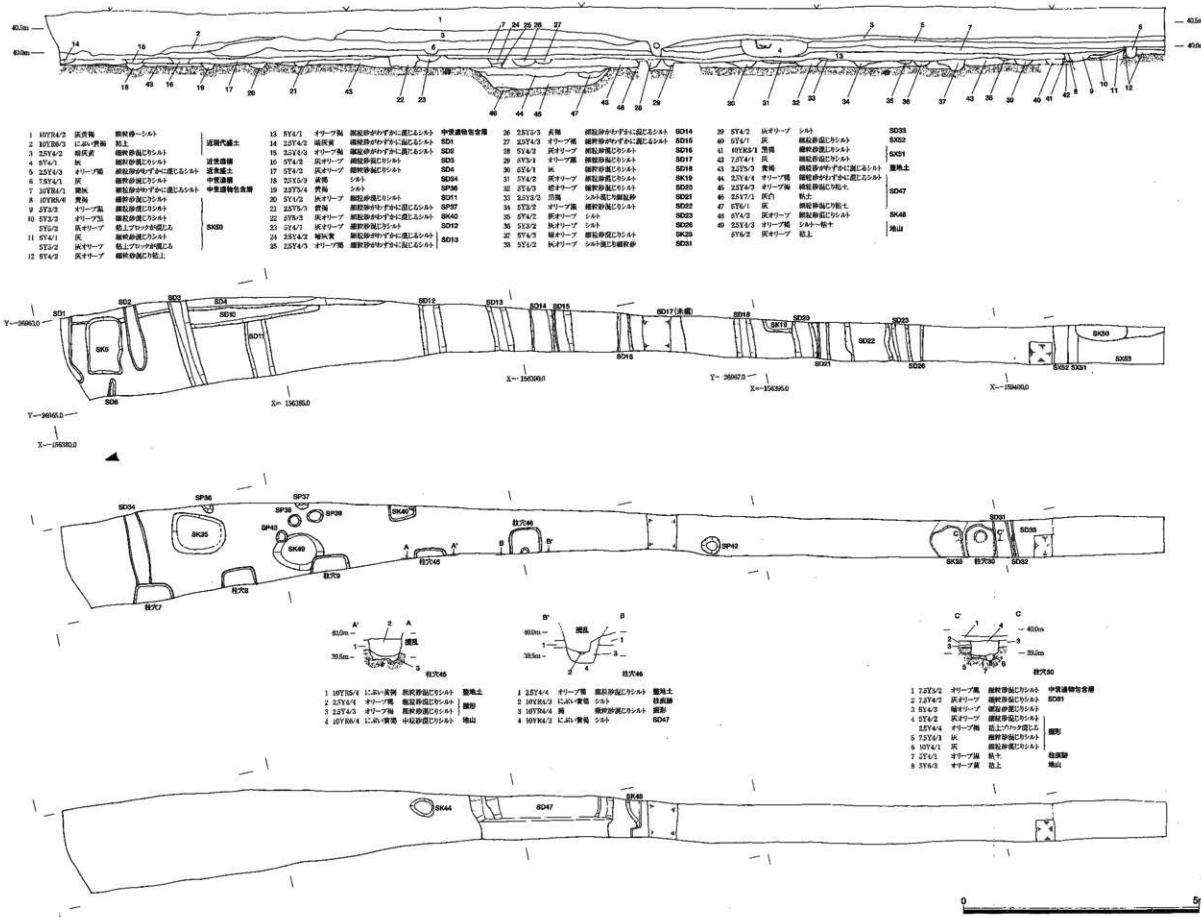


図16 Nトレーニング構造平面図・土層断面図 (1/80)

## 13 Mトレンチ

岩松寺本堂の北東側、Lトレンチの南側に位置するトレンチである。大きさは南北2.0m、東西1.6m。現地表下約1.0~1.1m、標高39.8~39.9m付近においてオリーブ褐色系の土がベースとなる遺構面を確認した。遺構面では南北方向・東西方向に展開するSD1~SD9の素掘り溝が検出できた。素掘り溝からは瓦器片などが出土しておらず、土師器片・須恵器片・瓦片などが出土しているだけであるが、これも他のトレンチで検出した素掘り溝と同様の時期の遺構と考えられる。

素掘り溝を完掘した後、遺構面のベースとなる土が地山土とは異なるためにさらに遺構検出に努めたが、トレンチ全体がまだな土に覆われており、遺構の形状が判断しにくい状況にあったので、全体を約15cm掘り下げて再度、遺構検出を行った。その結果、柱穴10を検出するとともに、トレンチ全体が東西方向の大型の溝(SD11)内に位置し、先の素掘り溝はこのSD11の埋土上に形成されていることが判明した。トレンチ東壁の状況から、柱穴10もSD11の埋土上から形成されていることがわかり、南北長が約60cm、東西長が20cm以上の方形である。平面検出のさいには判断できなかったが、遺構掘削の後に直径約20cmの円形になると見られる柱痕跡があることを確認した。柱穴の埋土からすると、柱は抜き取られたものと考えられる。柱穴10からは土師器片・須恵器片・瓦片が出土しているだけで、時期決定できるような遺物は出土していないが、Bトレンチの柱穴4・柱穴2、Lトレンチの柱穴5と直線で並び、南北の柱間距離である20mにも合う位置にあることから、これらと同じく1棟の掘建柱建物を構成していたと考えられる。

SD11は南北・東西ともにトレンチ外へと広がっており、全体の形状は不明である。トレンチの北側付近で東西方向に1段落ちている状況がようやく確認できる。深さは西壁で約40cm、東壁で約64cmあり、トレンチの中央付近から南東方向にさらに1段落ちている。SD11からはGトレンチのSD7から出土したものと同じ焼成具合の行基丸瓦(4~6)が出土している。検出した位置や西から東に向かって深くなっている形状、それに同じ出土遺物があることからすると、SD11はGトレンチのSD7と同じ遺構であると考えられる。SP12はSD11の下層から検出した1辺が約20cmの方形のピットである。

## 14 Nトレンチ

岩松寺本堂の北東側から南西側にかけて、B・L・M・K・Jトレンチの東側には接するトレンチである。Nトレンチは拡幅後の道路境界部分に築かれるコンクリート壁にともなうものであるので、これまでのトレンチとは形状が異なっており、大きさが南北長23m、東西長最大2.0m、最小0.8mである。現地表下約1.0~1.1m、標高39.8~39.9m付近で黄褐色の細粒砂がわずかに混じるシルトがベースとなる遺構面を確認した。遺構面は北から南にかけて徐々に高くなっている、遺構面上では南北方向・東西方向の素掘り溝、土坑、柱穴など、多数の遺構が検出できた。素掘り溝であるSD1・SD3からは瓦器片が出土していることから、Nトレンチで検出した素掘り溝の多くは他のトレンチと同様、中世の遺構であると考えられる。SK5からは近世磁器や近世瓦が出土しているので、近世の遺構であることは明らかである。柱穴7・柱穴8・柱穴9はその位置からして、それぞれBトレンチの柱穴4・柱穴2、Lトレンチの柱穴5と同じ遺構であることは間違いない。

これらの遺構を完掘した後、これまでのトレンチ調査から遺構面のベースとなっている土が整地土層にあたることは予想できたが、遺構か整地土かを判別しがたいものもあったために、トレンチの東半分を約10~20cm掘り下げ、断ち割りを行った。その結果、遺構面のベースとなっていた土がやはり整地土層であることが判明し、整地土の下にはオリーブ褐色でシルト~粘土の地山があることを確認した。そして、土坑・ピット・柱穴・溝などの多数の遺構も検出した。しかし、断ち割りをして検出した遺構も断面を観察したところ、SD47を除いては整地土層上から形成された遺構であることがわかった。なかでも注目されるのは、柱穴45・柱穴46である。柱穴46はその位置からしてMトレンチで検出した柱穴10と同じであることは間違いない。柱穴45は1辺約80cmの方形

になると見られるが、大半がトレンチ外へと続いて柱痕跡も検出できなかつた。しかし、その位置からしてこれまでにB・E・L・Mトレンチで報告してきた柱穴と関連して1棟の掘立柱建物を構成する柱穴であると考えられる。柱穴30も検出したときにはわからなかつたが、断ち割りを行つたところ柱穴であることが判明した。しかし、こちらはその位置からして柱穴45・柱穴46などとは別の建物・構を構成する柱穴であると見られる。また、SD47はGトレンチのSD7・MトレンチのSD11と同一の溝であり、西から東にかけて大きく広がるものであることがわかつた。SD47は整地土層の下層、地山上から形成され、南北長が約3.8m、深さが約40cmである。SD47からはG・Mトレンチと同じく行基丸瓦(7)が出土し、胎土や焼成具合も非常に近似している。

### 第3章 出土遺物

#### 1 瓦

行基丸瓦 1～3はGトレンチのSD7から出土している。1は狭端と側面が残る破片であり、厚さ1.5cmを測る。色調はにぶい橙色。焼き上がりは良好で表面の摩滅も少ない。凹面は丁寧に横なぎで施されているが、無文の叩き板で成形されたのか直線的な部分が残る。凹面には摸骨にかぶせた布袋の圧痕があり、縦9本/cm、横12本/cmの布目が数えられる(以下、布圧痕(布目数)と表記する)。また、12cm幅で布袋の縦じ合わせの圧痕が残り、その端に8mmのぐし縫いの縫目が観察できる。側面は凹面側から入れられた切り込み痕と破断面が器面調整されずに残っているが、凹面側縁狭端付近には面取りが施されている。狭端面は未調整で粗い器面となつてゐる。2は全長35.7cmに復元でき、厚さ1.7cmを測る。色調は灰黄褐色を呈し、焼成は軟質である。凹面は摩滅が激しいが横なぎで施されている。凹面には布圧痕(縦12本/cm、横11本/cm)と狭端から広端まで33cm幅で布袋の縦じ合わせの圧痕、さらにその縦じ合わせ部分の左側には1本の糸状の圧痕が認められるが、凹面側広端縁付近では横なぎでされて布目が消えている。凹面側縁下半部には面取りが、狭端面・広端面にはなでが施されている。3は全長38.0cm、狭端幅14.0cm、狭端高7.0cm、広端幅21.5cm、広端高12.0cm、厚さ3.0cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は軟質である。凸面にはなでが施され、凹面には糸引き痕と布圧痕(縦8本/cm、横9本/cm)、布袋の縦じ合わせの圧痕が認められる。その圧痕から1.2cmの折込幅で布を縦じ合わせたものと見られる。凹面側から見て左側面下部と右側面に沿つて分割突帯の圧痕があり、側面は分割した後に面取りして器面調整を行つてゐる。広端面は成形時のままで器面調整を行はず、狭端面はなで調整が施されている。

4～6はMトレンチのSD11から出土している。4は全長38.4cm、狭端幅15.6cm(復元)、狭端高8.0cm、広端幅22.0cm(復元)、広端高10.7cm、厚さ2.9cmを測る。色調は褐灰色を呈し、焼成は軟質である。凸面はほとんど摩滅しているが、なで調整されていることが観察できる。凹面も摩滅と剥離が激しいながらも布圧痕(縦8本/cm、横10本/cm)と糸引き痕が観察でき、広端側では粘土が帶状に剥離している。側面は分割した後に面取りが行われ、広端面は成形時のまま未調整である。狭端面は摩滅欠損しており調整は不明である。5は広端と側面が残る破片であり、法量は復元できなかつた。厚さ1.6cm。色調は凸面が褐灰色、凹面がにぶい黄褐色を呈する。焼成は軟質で、2mm程度の砂粒を含む胎土をもつ。凸面はなで調整されている。凹面には布圧痕(縦11本/cm、横11本/cm)が認められ、凹面側広端付近は2.3cm幅のヘラ状の工具で縦方向になでられている。側面は分割した後に面取りが行われ、広端面は成形時のまま未調整である。6は全長36.3cm、狭端幅13.9cm(復元)、狭端高6.1cm、広端幅16.0cm(復元)、広端高10.0cm、厚さ1.6cmを測る。色調は凸面がにぶい黄褐色、凹面が灰黄褐色で、胎土は2mm程度の砂粒をわずかに含んでいる。凸面は縦横方向になでが施されているが、成形時の叩き板の影響か直線的な部分が認められる。凹面には糸引き痕と布圧痕(縦9本/cm、横10本/cm)があり、欠損部の破断面に沿つて布袋の縦じ合わせの痕が認められるが、縦じ合わせの技法までは確認できない。側面は分割後に面取りを行ひ、凹面側縁には幅9mmの面取りを行つてゐる。広端面・狭端面はなでが施され、広端面にはなで調整のさ

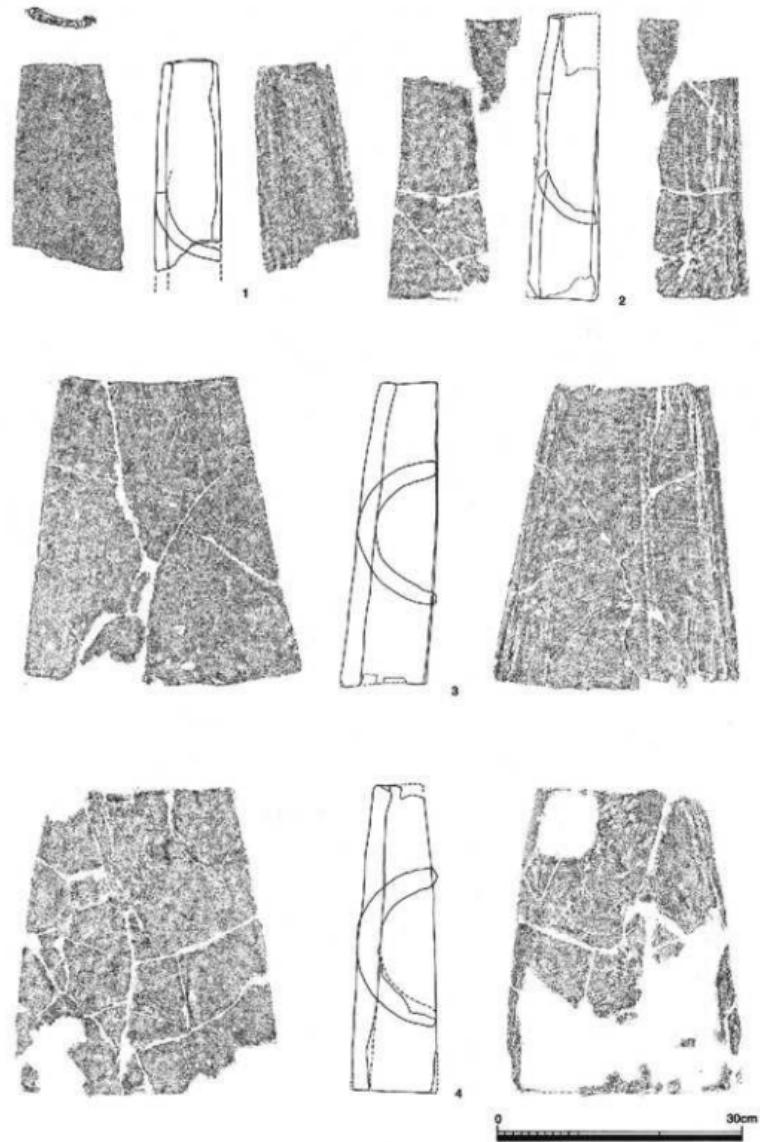


图17 出土瓦实测图 1 (1/6)

いの沈線状の筋が見える。

7はNトレンチのS D47から出土している。7は全長36.0cm、狭端幅12.8cm、狭端高8.1cm、広端幅16.8cm(復元)、広端高10.7cm(復元)、厚さ2.0cmを測る。色調は凸面が明赤褐色、凹面が褐灰色で、焼成は軟質。2~5mmの砂粒を含む胎土をもつ。凸面は横なでが施されているが、成形時の叩き板の直線的な形状が残存している。凹面には糸引き痕と布圧痕(縦11本/cm、横11本/cm)が認められる。凹面中央付近には3.4cm幅の布袋の縫合せ痕があり、その形状とその左側に1本の糸状の圧痕があることなどから、2の丸瓦に使用された布袋と同様のものである可能性がある。両側面に沿って分割突帯の圧痕があり、凹面側から分割している。凹面側から見て左側面は分割後の調整は行わず、右側面の凹面側縁では面取りを行っている。広端面・狭端面はなで調整である。

以上の行基丸瓦が出土したGトレンチのS D7、MトレンチのS D11、NトレンチのS D47は図22に示すように一連の溝と考えられる。これらの行基丸瓦は色調、焼成ともによく似ており、その大きさによって、全長36.0cm前後、厚さ1.5~2.0cm(1・2・5・6・7)と全長38.0cm前後、厚さ約3.0cm(3・4)の2種に分類することができる。

8・9はNトレンチの地山直上から出土している。8は狭端と側面を残す破片で、厚さ1.9cmである。色調は凸面が灰白色、凹面が灰黄色で、胎土は4~7mm程度の砂粒をわずかに含み、硬質に焼き上っている。凸面は成形時の叩き板の直線的なラインを残しているが横なでを施し、凹面には布圧痕(縦8本/cm、横6本/cm)がある。分割後、凹面側縁に幅1.9cmの面取りを行い、狭端面にはけずりが施されている。9は広端と側面を残す破片で、厚さ1.9cmである。色調は凸面が灰白色、凹面が灰黄色で、4mm程度の砂粒を含む胎土をもち、8と同様に硬質な焼き上がりとなっている。凸面は縦横になでが施されている。凹面には布圧痕(縦8本/cm、横6本/cm)があり、分割後、凹面側縁に幅1.0cmの面取りをしている。8・9は、同地点から出土していることや色調・焼成・調整に共通点が多いことから、同一固体であるか同時に製作されたものである可能性が高い。

10・11はBトレンチのS K16から出土している。10は狭端と側面が残る破片である。色調は黄橙色。胎土に2~5mm程度の砂粒をわずかに含み、軟質の焼き上がりとなっている。凸面は縦横になでが施されており、成形時の叩きの痕跡は残さない。凹面には狭端に直交する傾きの糸引き痕と布圧痕(縦10本/cm、横11本/cm)がある。分割は鋭い工具が用いられたのか側面の器面に乱れではなく面取りの角も鋭いものとなっている。狭端面はなで調整が施されている。11は広端と側面が残る破片である。色調は凸面がにぶい黄橙色、凹面がにぶい褐色を呈し、3~4mmの砂粒を含む胎土で軟質な焼き上がりである。凸面は横なでが施され、かすかに繩叩きの痕跡を残す。凹面には粗目の布圧痕(縦6本/cm、横5本/cm)があるが、布目の密度は一定でなく、著しく布目の詰まつた圧痕が認められる箇所もある。広端面はなで、凹面側広端縁には幅1.0~1.7cmのなでが施されている。側面の器面は整っており、凹凸両面側に5mm程度の面取りを行っている。

平瓦 12・13はEトレンチのS K8から出土した。12は狭端と側面が残る破片で厚さ1.9cmを測る。色調は灰白色で胎土に5mm程度の砂粒を含み、焼き上がりは硬質である。凹面には布圧痕(縦7本/cm、横6本/cm)と幅約4.4cmの棒板痕、側面に沿う分割界線が認められる。凸面はなでが施され、叩き目の痕跡を残さない。側面には凹面からの切り込みと未調整の破断面が観察され、桶巻作りの平瓦であることがわかる。また、凸面は狭端部6.5cmを残して二次焼成を受けており、変色と炭化物の付着が認められる。割れ口と凹面にも同様に炭化物の付着が見られるので、屋根上で火災にあったものではなく、転用されていたものと考えられる。13は狭端と側面が残る破片で厚さ1.9cmを測る。凹面が灰白色、凸面が黒褐色の色調を呈し、胎土に2~4mmの砂粒を含む軟質の平瓦である。凹面には布圧痕(縦7本/cm、横8本/cm)と幅3.8cmの棒板痕が認められ、側面に沿って分割界線の圧痕がある。側面は分割後に面取りを行っている。凸面はなでが施され、叩き目の痕跡は残さない。狭端面はなで調整である。凹面には一部に二次焼成を受けた痕跡があり、炭化物の付着も見られる。

今回の調査で出土した瓦類は、いずれも7世紀初めの特徴をもち、片岡王寺に関連する瓦であると考えられる。

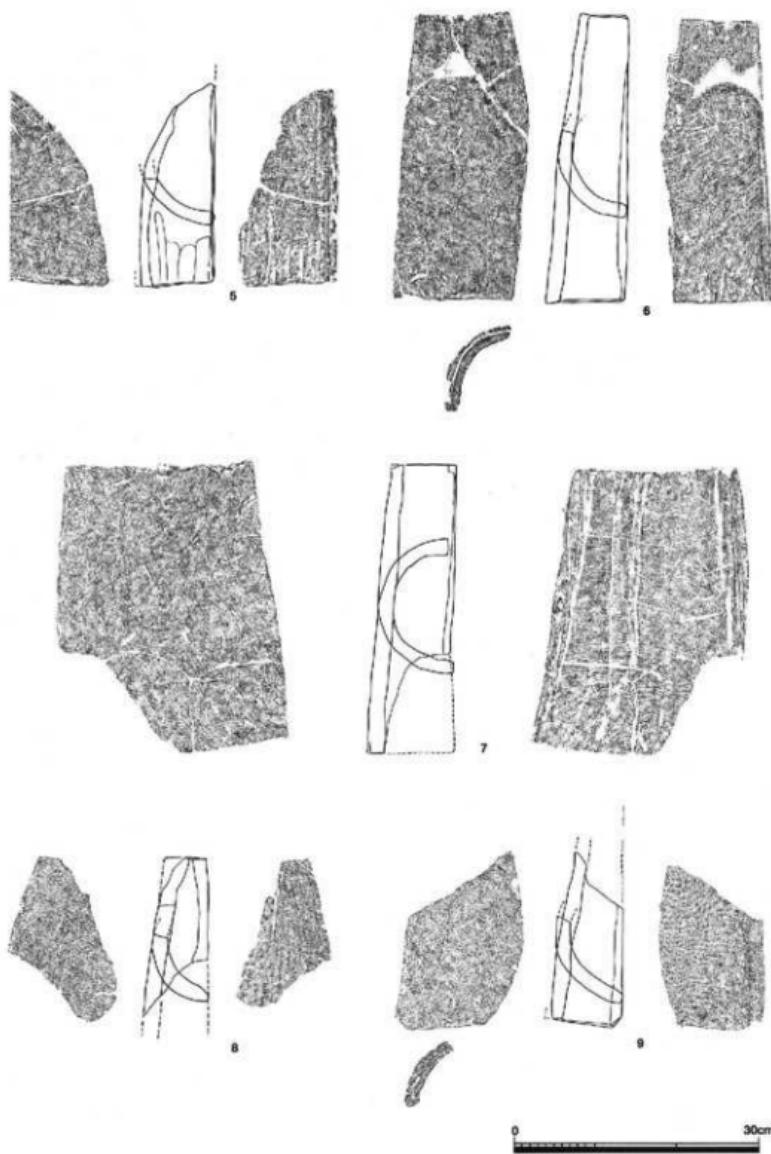


图18 出土瓦实测图 2 (1/6)

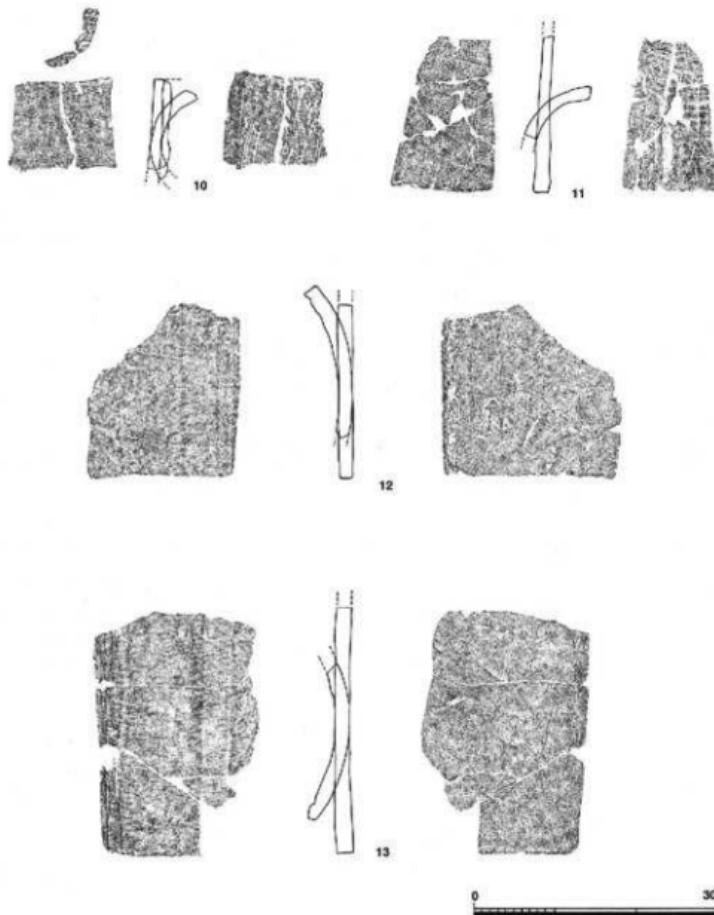


図19 出土瓦実測図 3 (1/6)

## 2 土器

須恵器 14はBトレンチのSK7から出土している。口径8.6cm(復元)、高さ3.0cm(復元)で、宝珠つまみをもつ杯Gの蓋である。外面が灰色、内面が青灰色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まない。飛鳥I～IIの時期であろう。

15はNトレンチの整地土から出土した杯蓋の破片である。色調は灰白色で焼成も良好である。全体の法量は復元できなかったが、宝珠つまみの形状から飛鳥Ⅱ前後の時期である。

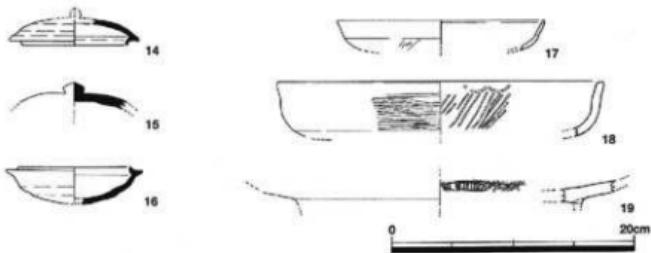


図20 出土須恵器・土師器実測図(1/4)

16はNトレーナーのS P43から出土した杯Hの身である。色調は灰色で、口径9.2cm、高さ3.1cmに復元できる。飛鳥I～IIの時期である。

土師器 17はNトレーナーの柱穴9から出土した皿である。色調は橙色で、小さな破片であるが口径17.0cm、高さ3.0cmに復元できる。底部はケズリで成形した痕跡がある。口縁はやや外半させて立ち上がり、口縁端部がつまみ上げられている。内面に暗文がないことから奈良時代後半の遺物と考えられる。

18はNトレーナーS D47から出土した皿である。口径26.9cmに復元できる。外面は底部がナデ、体部が細かいヘラミガキ、口縁部がナデ調整である。内面はナデ調整された後、口縁部には連弧暗文、放射状暗文が施される。その器壁の厚さから高台の付く皿Bと見られ、平城IIの時期の遺物であると考えられる。

19はJトレーナーのS K5から出土している。底部のみが残存しており、高台の接合部分が剥離している様子が見て取れる。内面は灰褐色、外面にはぶい黄色を呈しており、底部内面には放射状暗文と螺旋旋暗文が施される。外面はナデで器面調整される。皿Bもしくは杯Bと見られ、平城II～IIIの時期のものである。

### 3 参考資料

20は調査終了後の工事中に遺物包含層から出土した瓦であるが、片岡王寺の特徴的な遺物であるので報告しておく。色調は黄灰色で、焼成はやや軟質である。瓦当の厚さは3.8cmを測る。丸瓦との接合部分の剥離面が部分的に残るが、刻み目などは施されていない。内区の珠文3点と6弁の花弁が残存し、單弁16弁蓮華文軒丸瓦の破片と考えられる。

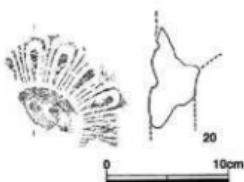


図21 出土軒丸瓦実測図(1/4)

#### (参考文献)

遺物の観察、年代に関しては次の資料を参考にした。

瓦：大島康「研究ノート丸瓦の製作技術」「研究論集」奈良文化財研究所学報第49集 奈良文化財研究所 1991年

香芝市二上山博物館編「尼寺座寺I—北庭寺の開創—」香芝市教育委員会 2003年

佐原真「平瓦彫き作り」「考古学雑誌」第58巻2号 1972年

富田林市教育委員会編「新堂庵寺跡・オガジ池瓦窯跡・お龜石古墳」富田林市教育委員会 2003年

法隆寺昭和資料叢書集委員会編「法隆寺の至宝 瓦」法隆寺昭和資料叢書第15巻 小学館 1992年

土器：古代の土器研究会編「古代の土器I 古代の土器集成」古代の土器研究会 1991年

## 第4章 調査の成果

では最後に、第2章・第3章で報告した内容にもとづいて、片岡王寺跡第3次発掘調査の成果についてまとめできたい。

### 1 近世盛土層と岩松寺

調査の結果、調査地の層序はおおむね上から順に、近現代盛土層・近世盛土層・中世遺物包含層・地山（J・K・L・Nトレンチでは地山と中世遺物包含層との間に整地土層が入る）であることが判明した。調査費用の都合により、遺構は地山上と整地土層上の2面から検出しただけであるが、A・B・E・F・H・I・K・Nトレンチの断面からは近世盛土層と中世遺物包含層上でも遺構が形成されていることが確認できる。近世盛土層と関連するIトレンチのS D 5からは17世紀代の大和I2型の土釜片が、近世盛土層から形成されていたと見られるNトレンチのS K 5からはコンニャク印判をもつ磁器碗片が出土しているので、近世盛土層は享保2年(1717)の岩松寺本堂建立期の盛土である可能性が指摘できるだろう。このことを踏まえるならば、中世遺物包含層は岩松寺の前身にあたると考えられる村の道場的な性格をもつ堂宇建立にともなう盛土と想定することができるだろうか。今後、詳細な調査ができれば、中世の村落形成の解明にも貢献するはずである。

### 2 素掘り溝の評価

今回の調査で検出した遺構のうち、数量的に多く認められたのが素掘り溝である。Aトレンチを除くすべての各トレンチにおいて、おおむね南北方向・東西方向に展開している状況が検出できた。素掘り溝のうち半数ほどからは瓦器などの中世遺物が出土していないが、いずれも中世の素掘り溝になると考えている。素掘り溝からの出土遺物は詳細な時期を決定しにくい小片ばかりであるが、EトレンチのS D 6から出土している高台が退化した時期の瓦器碗片とCトレンチのS D 3から出土している瓦質土器片が参考になる。これだけで遺構の時期を決定するわけにもいかないが、この2点の遺物を最大限に評価するならば、おおむね素掘り溝は14世紀末から15世紀代の遺構といえるだろう。この時期は、片岡王寺が永承元年(1046)の雷火を契機に大きく衰退していたのに対して、達磨寺は東大寺・興福寺からの焼討による荒廃から大きく立ち上がりこうとした復興期にあたる。

また、素掘り溝の分布状況を見ると、調査地の東側付近では激しい切り合いをもっているが、西に向かうに従って徐々に希薄になっているという特徴が見て取れる。調査地の東側が達磨寺に近い場所であることを踏まえるならば、素掘り溝は達磨寺に関連する遺構と考えることができるだろう。

この時期の達磨寺復興は14世紀末から15世紀前半にかけてなされ、足利將軍の支援もあって成就したが、今回検出した一連の素掘り溝を、達磨寺復興を現場で支えた人々の生活痕跡として捉えることができないだろうか。今回の調査成果だけでは議論できないが、ひとつの私案として提示しておきたい。

### 3 片岡王寺の関連遺構

素掘り溝のほかに主な遺構として、掘建柱建物、整地土層、整地前の東西溝を検出した。これらはすべて片岡王寺に関連するものと考えられる。まずは、これらの遺構について各トレンチの調査成果をまとめておきたい。

**掘建柱建物** 今回の調査で掘建柱建物として検出した柱穴は、Bトレンチの柱穴4（Nトレンチの柱穴7）、Bトレンチの柱穴2（Nトレンチの柱穴8）、Iトレンチの柱穴5（Nトレンチの柱穴9）、Nトレンチの柱穴45、Mトレンチの柱穴10（Nトレンチの柱穴46）、Bトレンチの柱穴3、Bトレンチの柱穴1、Eトレンチの柱穴12の8基である。これら8基の柱穴は、南北方向・東西方向に直線で並び、かつ柱間の距離も南北2.0 m、東西2.5 mの同一距離でそろうので、1棟の掘建柱建物を構成していたと考えられる。柱穴の配置状況からは、柱穴

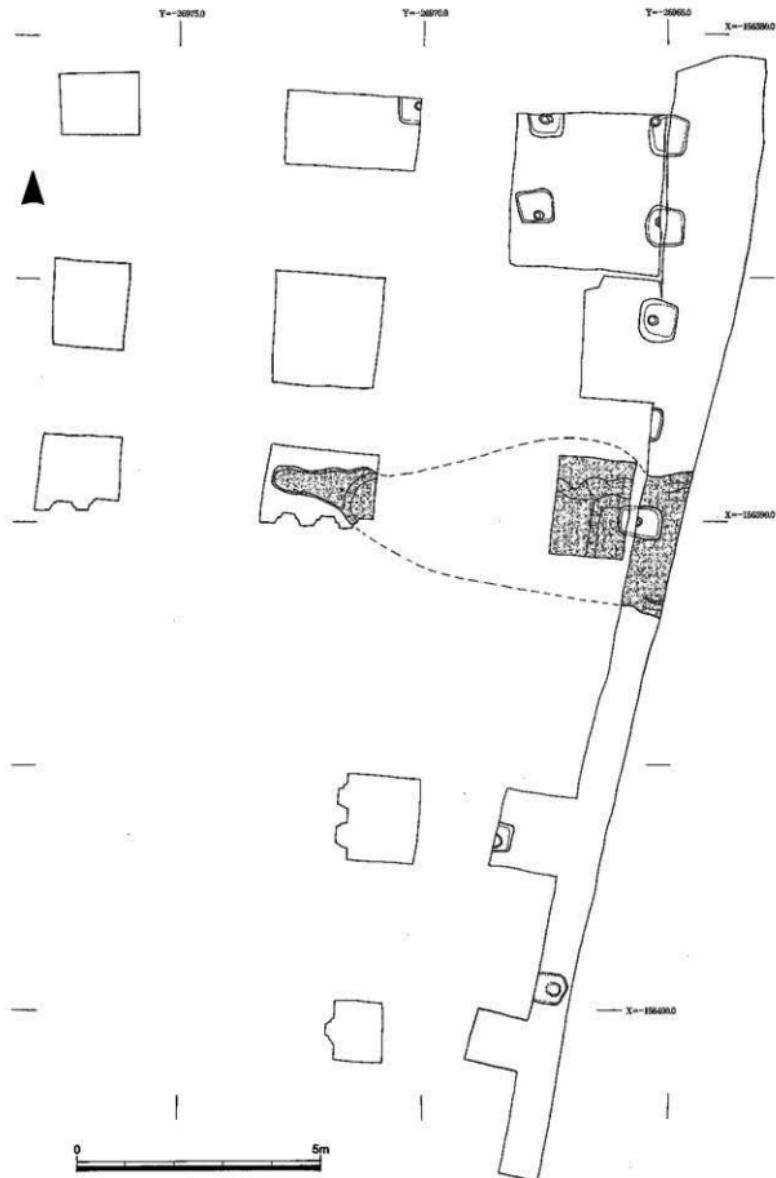


図22 片岡王寺関連遺構平面図(1/100)

がこれ以上南と西には広がらないことがわかるが、北・東にかけてはまだ広がる可能性がある。現状では南北4間、東西2間の建物となる。建物の南北軸は座標軸のそれに対して東に35°傾いている。掘立柱建物の柱穴からは時期を決定できるような遺物が出土していないが、Nトレンチの柱穴9から小片であるが暗文をもたない土師器皿(17)が出土していること、この掘立柱建物が後述する整地前の東西溝が埋められ、整地土層が入れられた後に建てられていることから、掘立柱建物の時期は8世紀後半頃と考えることができるだろう。

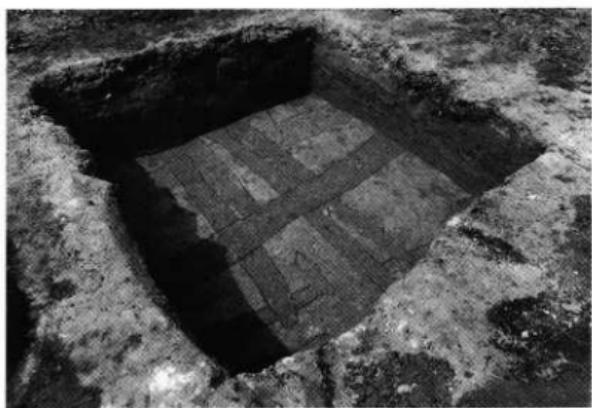
**整地土層** 調査地の東側にあたるJ・K・L・Nトレンチにおいて地山の上に積まれていた盛土層である。調査地の西には片岡山と呼ばれる小高い丘陵があり、調査地はその山麓にあたるために地山が東に向かって傾斜している。整地土はその傾斜によって低くなっている部分に入れられたと見られる。整地土層は最大で約25cmの厚みがあるが、一方で調査地の西半と東半では地山の標高差が約10cmしかないことを考えると、整地土が入れられていない西半では地山を削り出す整地作業が行われている可能性も指摘できる。しかし、調査地の西半では古代にさかのほることが明確な遺構が検出できなかったので詳細は不明である。

整地土層からも時期を決定できる遺物がほとんど出土していないが、片岡王寺の創建瓦と見られる行基丸瓦(8・9)が出土している。しかし、後述する整地前の東西溝には8世紀前半の遺物が含まれているので、整地を行基丸瓦の時期にあることはできず、8世紀前半以降となる。先に述べた掘立柱建物が8世紀後半頃で、整地土が入れられた後に建てられていることからすると、整地作業は8世紀中頃前後にわたったと考えられる。

**整地前の東西溝** GトレンチからM・Nトレンチにかけて検出した東西方向の溝である。GトレンチのSD7、MトレンチのSD11、NトレンチのSD47がこれにあたる。溝の西端はGトレンチで確認しており、幅が約50cm、深さが約1cmである。検出できた東端はNトレンチで、幅が約38m、深さが約40cmにまで広がつておらず、溝が東に向かうに従って大きく、深くなっている。東は調査地外へとさらに続いている。Mトレンチでは溝がトレンチを超えて広がっていることが確認できたので、この部分では溝が不正形に広がっていることになる。溝は整地土が入れられているNトレンチでも地山上から形成されており、整地以前に機能していた溝であることがわかる。東側で大きな規模をもつ溝が、西にわずか8mほどの地点で急速にしばむようにして途切れているのは形状として不自然で、もとは同規模で傾斜をもちながら東西に長く続いていたものが、8世紀中頃前後にわたった整地作業によって調査地の西側で地山が削り出され、溝の西半が失われてしまったのだろうか。

溝からは行基丸瓦(1~7)が多く出土しており、片岡王寺の創建期に近い年代から溝が開削されていた可能性もあって興味深いが、出土遺物の最下限は平城IIと見られる土師器皿(18)であるので、8世紀前半から中頃までの間に埋められ、その機能を失ったものと考えられる。

**片岡王寺との関連** 以上のように、整地前の東西溝、整地土層、整地後の掘立柱建物は、遺構の検出位置や時期、出土遺物などからして片岡王寺に関連するものと考えられる。そして、それらは8世紀前半から中頃、後半にかけて継続的に造営された。片岡王寺は出土瓦や想定される伽藍配置などから7世紀前半の創建と考えられているので、それから1世紀余りを経て調査地付近の整地が行われ、掘立柱建物が建立されることになる。調査地が中心伽藍の想定位置から北東に約150mのところであることからすると、片岡王寺は8世紀に入ってから本格的に寺域を拡大し、関連施設が多く建てられていったと理解できるのではないだろうか。こうしたことは、2004年度に奈良県立橿原考古学研究所と王寺町教育委員会が実施した片岡王寺跡第1次発掘調査において、同じく中心伽藍の想定位置から東に約100mの地点で奈良時代の石積み溝と掘立柱塀が検出された成果とも符号する。正安4年(1302)撰述の「放光寺古今縁起」には、片岡王寺の関連施設として「封倉」や「要屋」の建物が数多く記されており、そのなかには「草葺」のものもあることから、今回の調査で検出した掘立柱建物はこうした施設にあたる可能性が指摘できるだろう。これまでの調査成果も鑑みると、掘立柱建物が中心伽藍の北東側に多いという傾向を見出すことができるが、まだ発掘調査事例が少ないので不明瞭な点が多く、調査地付近と中心伽藍とのつながりなどを含め、今後の調査に期待されるところである。



B トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(北東から)



B トレンチ  
柱穴検出状況 (西から)



B トレンチ  
柱穴半裁状況  
(南から)



Bトレンチ  
柱穴2半裁状況  
(西から)



Bトレンチ  
柱穴3半裁状況  
(南東から)



Bトレンチ  
柱穴4半裁状況  
(南西から)



C トレンチ  
遺構検出状況  
(東から)



D トレンチ  
遺構検出状況  
(東から)



E トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(南東から)



E トレンチ柱穴12  
柱痕跡半裁状況  
(南西から)



F トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(南から)



G トレンチ  
遺構検出状況 (東から)





K トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(南から)



K トレンチ  
柱穴 7 土層断面  
(東から)



L トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(北西から)



L トレンチ  
柱穴 5 半裁状況  
(西から)



M トレンチ  
素掘り溝検出状況  
(南西から)



M トレンチ柱穴 10 ·  
S D11 土層断面  
(西から)



N トレンチ素掘り溝検出状況（北から）



N トレンチ整地土断ち削り状況（北から）



N トレンチSD 47 半裁状況（南から）



N トレンチSD 47 土層断面（北西から）



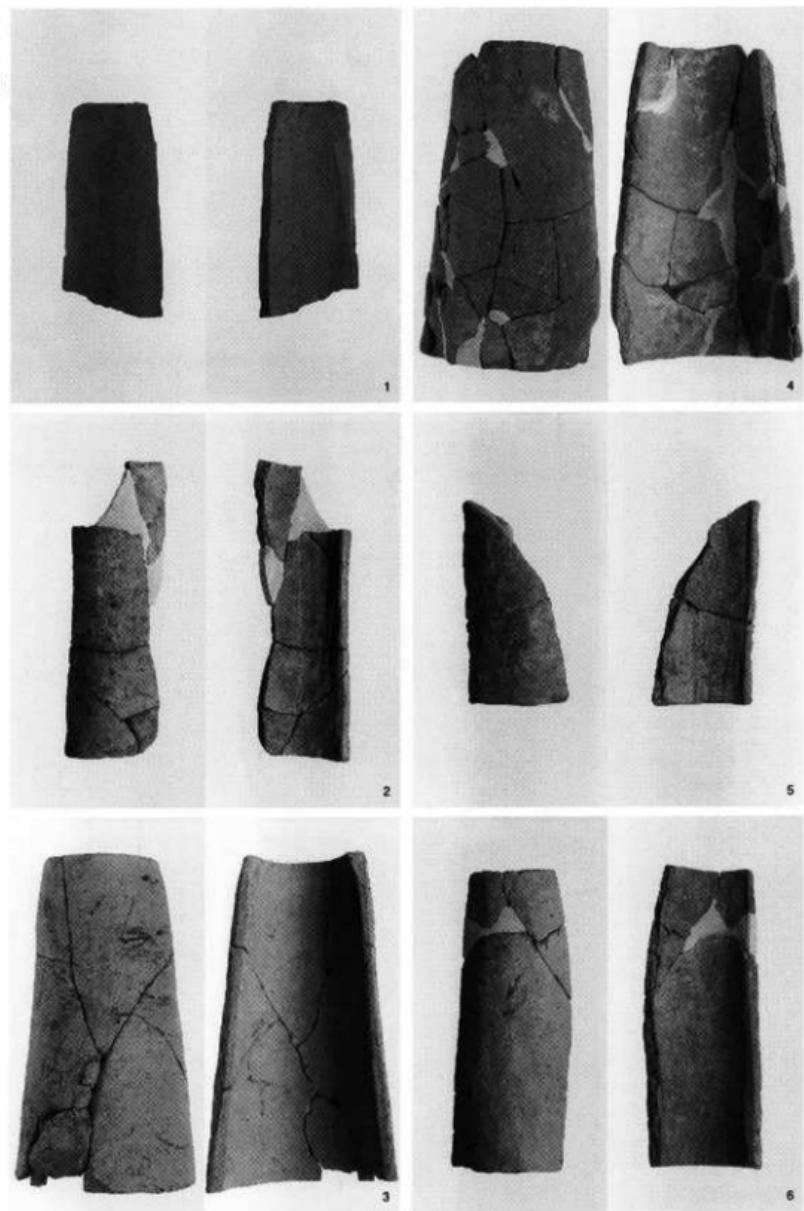
N トレンチ  
S D 47土層断面  
(南西から)



N トレンチ  
柱穴45土層断面  
(南東から)



N トレンチ柱穴46  
柱痕跡検出状況  
(南東から)



出土遺物 1



7



10



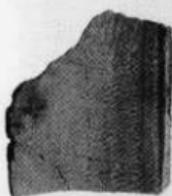
8



11



9



12

出土遺物 2



13

20



14



15



16



17



18



19

出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	かたおかおうじあとだいさんじはくつちょうさほうこくしょ									
書名	片岡王寺跡第3次発掘調査報告書									
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書									
シリーズ番号	第6集									
編著者名	岡島永昌、櫻井恵									
編集機関	王寺町教育委員会									
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号									
発行年月日	平成18(西暦2006)年3月31日									
レコード番号 集録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
かたおかおうじあと 片岡王寺跡	奈良県 北葛城郡 王寺町 1丁目 1698番1	市町村 番号	遺跡 番号	29425	10B 5	34° 33' 9'	133° 6' 17'	2005.05.23.~06.10. 2005.10.12.~10.21.	72m <sup>2</sup>	庫裏建設
レコード番号 集録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項			
かたおかおうじあと 片岡王寺跡	寺院	古代 中世	東西溝 整地土層 掘建柱建物 素振り溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、軒丸瓦、行基丸瓦、平瓦						

片岡王寺跡第3次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第6集

2006年3月31日

編集 王寺町教育委員会

発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号

印刷 株式会社 明新社

奈良市南京終町3丁目464番地